



模擬国連定例大会 2022年冬

フィードバックおよび Q&A

2022年12月24日

会議監督

これまで受けた質問への回答、全体で共有したほうが良いこと、また皆さんの PPP を拝見していて、気になった点がいくつかございましたので、皆さんに共有いたします。

<全体的なフィードバック>

・BGに込められた意図とミッションに立ち戻る

穀物、肉以外の食料や農産物（野菜、コーヒー豆、カカオ、酪農、パーム油、など）についての言及、一般的なバイオエネルギーについての言及、環境についての言及が多く見受けられました。これらは今会議の主眼である食料安全保障に帰着する説明ができなければアウトオブアジェンダになってしまいます。今回の会議は食料以外の他の分野と密接に結びついている議題ですが、BGの本質や作成者の意図を探り、理解を深めていくことが大切です。

今回の主題はやはり「穀物」です（バイオエネルギーや家畜の餌のこともあるので広義的にトウモロコシ、大豆等も含めて考えましょう）。野菜、魚介類、酪農、コーヒー豆など、栄養バランスや食事の多様性という意味では重要な食料、農産物かもしれませんが、今回は、端的に言う「世界の全ての人々が主食となる食料、いわば穀物を十分に得られるようにするにはどうしたらよいか？」ということが最大の問いです。

論点1の食肉はそれを生産する過程でたくさんの穀物を餌として消費してしまいます。食肉消費が増えると家畜の口に運ぶ穀物量が増えて人間の口に運ばれる量が減ってしまいます。近代化が進むにつれて食肉消費が増大する中で人間が食料として手に入れるべき穀物をどのように確保し、どのように食肉文化とバランスとっていくのかということを考えなくてはなりません。論点2のバイオエネルギーも同様です。エネルギーの多様化や脱炭素を進めるうえで重要なエネルギー資源で、その点からいうと促進されるべきものかもしれませんが、経済的に促進したい国も多いでしょう。しかし、それによって、本来人間の口に届けられるべき食料をエネルギー資源として消費してしまいます。その作付面積が増えれば純粋な食料のための農地が減っていきます。食料もエネルギーもどちらも人間にとっては不可欠です。その前提で、バイオエネルギーを食料安全保障の側面からどのように考えていくのか、バランスを取っていくのかという論点です。論点4にある「投機」も同じ話です。本来は食べるための食料が金融商品になってしまい、食べるためではなくお金の儲けのために買われている、その結果、食料の供給が止まってしまう、高値になりすぎて手に入れない人が出てきたりしているという問題です。さて、今回は上述の通り、穀物、肉以外の食料や農産物についても多くの大使が PPP 内で言及していますが、皆さんは「穀物供給量の確保」という文脈でこれらの説明をできますか？説明ができるのであればそれは論点内でしょう。説明ができないのであればアウトオブアジェンダとなり、あくまでもバックグラウンドの議論にとどめていただくことになります。

このように BG には問いや意図が隠されています。そして、それは論点や会議の目標を見れば分かるので、是非難しいと感じたらそこに立ち返ってください。

・BGに込められた意図とミッションに立ち戻る

皆さんも覚悟されているかと思いますが、今会議はとてもハードな会議です。論点も広く、対

立軸も多い中で、短い限られた時間で WP、DR を提出しなくてはなりません。論点だけをバラバラに見ていると議論がまとまりませんし、一貫性が保てません。まずは達成すべき会議のミッションを意識し、そして「世界の全ての人々が主食となる食料、いわば穀物を十分に得られるようにするにはどうしたらよいか？」という先ほどの大きな問いを全大使が頭に入れ、それを論点という視点から切り分けて議論していくという意識を持っていただかなくては、この会議はまとまりませんし、食料をテーマにディベートをするだけの会議になってしまいます。

・アウトオブアジェンダなのか、どうかと考える際に

模擬国連は非常に短く、限られた時間の中で行うもののため、定められたアジェンダ外で議論してしまうとまとまりのない議論になってしまいます。スムーズに議論を進めるためにも、アジェンダ内で一貫性のある議論になっているかを PPP 記入段階で今一度見直してみましょう。

一方で、本来の国際会議にアウトオブアジェンダはないことを考えると、模擬国連会議においても広い議論が保障される必要もあります。またアウトオブアジェンダだとしても、リサーチやバックグラウンドの議論として必要になることもあるでしょう。「これはアウトオブアジェンダなのか？」と疑心暗鬼になって視野が狭くなったり、リサーチの手が止まったり、もしくは縮こまった無難な政策立案で終わってしまうことは本意ではありません。アウトオブアジェンダの扱いで重要なのは上述の通り「アジェンダ内で一貫性のある議論になっていること」「主眼の論点に帰着し、十分な関連性を説明できること」です。今会議であれば穀物供給の確保、食料の分配という文脈で一貫性があり、そして主眼である一次エネルギーに帰着する政策であるのか、それによってアウトオブアジェンダの判断が変わってきます。もちろん、提案する大使だけでなく議場全体がその関連や必然性を納得することが大前提です。

・自国の問題分析で満足せずに、政策立案につなげる

自国のことを調べるのが PPP の 1 つの目標なので、自国の問題分析をしっかり行っていることをアピールするのはとても大切です。ただ、PPP は Position and Policy Paper なので「Policy」の部分も同じくらい重要です。問題分析を基に論理的整合性の取れた政策を書くことではじめて PPP は完成します。この 2 つが上手く出来ていれば、後は勇気さえあれば会議でリーダーシップを発揮できます。

・国際社会に対してアプローチできていますか？

ここが実は熟練の大使と初心者の大きな違いです。何回か会議を経験する大使はやがて PPP が共有されることを理解し、自国のメッセージを他国に主張する目的で書くようになります。これに関しては程度にもよりますが、基本的に賢い動きです(基本的に、というのはたまたまメッセージだけ残して自国のことを全く書かない大使がいるのですが、これは PPP の本質からズレています)。他の大使に読まれることを意識して読みやすい文章・伝えたい内容を選別すると良いでしょう。また、基本的にその国の問題を解決するなら自国でやればよいわけですから、国際社会としてどういう取り組みをするべきなのかまで繋げるように心がけてください。

・簡単な合意はあり得ない、どれだけ合意は難しいことなのか

今回の議題とは異なりますが、気候変動の話をしてします。気候変動の原因は何ですか？誰でも「温室効果ガス」、そしてそれを排出する「化石燃料」と答えますよね。皆さんもエネルギーや気候変動の会議では「化石燃料」に触れる DR を作成することに違和感ないですよ？ところが現実には私たちの想像ほど甘くなく、ハードなやり取りがされています。以下は 2021 年にイギリス・グラスゴーで行われた COP26 (国連気候変動枠組条約締約国会議) に関する記事の抜粋で

す（出典：New York Times, Nov. 12, 2021, “Glasgow Climate Talks Are Down to the Wire on Money, Ambition and Fossil Fuels”）

They even disputed whether the final agreement should mention the words “fossil fuels,” which have never before appeared in a global climate agreement even though their combustion is the principal cause of climate change.

（彼らは最終合意文書の中で「化石燃料」という言葉について言及すべきかどうかという論争すらしているが、その燃焼が気候変動の主たる原因であるにも関わらず、そのような言葉はこれまで国際的な気候に関する合意文書には登場したことがなかったのである。

つまり、化石燃料の燃焼が気候変動の主たる原因であるのは共通の認識であるにも関わらず、特に石炭や石油に依存した国は「化石燃料」という言葉すら決議案で言及させたくないのです。これ、26年目の会議、今年の会議ですよ。さらに、このCOP26では石炭の廃止についても議論されましたが、中国、インドの激しい反対があり、全会一致が原則のため、妥協に妥協を重ねた合意文書になりました。その厳しい結果を受け、最後にはイギリスの議長が涙を流すという異例の会見となり、ニュースになりました。

・ボトムラインは見せない

ボトムラインが記載されたPPPがいくつか見られましたが、ボトムラインは自国の最低限の政策の妥協を示すもののため、本来共有しないものです。共有してしまうと自国の利益が最大限に守られない妥協した政策を提案されてしまうかもしれません。ボトムラインだけに限らず、何を共有すべきで、何を共有すべきではないのか、精査することも大切です。

<議題、政策に関するフィードバックと Q&A の共有>

・論点2 バイオエネルギー

バイオエネルギーを促進したい旨のPPPがいくつか見られます。しかし、今回は食料安全保障であり、会議のベクトルは「食料を確保する」ことに向かっています。人間の食料を確保することだけを考えればバイオエネルギーの促進はマイナス効果になりえます。つまり、今会議ではバイオエネルギーは制限をかける対象になります。ですので、決議案に「バイオエネルギーを促進する」というような一文はそのまま入りません。それだと食料安全保障として何の意義があるのか不明ですし、説明できません。だからと言って、バイオエネルギーの重要性や有用性を無視して、エネルギーや気候変動の会議では「バイオを増やそう」と主張する国が、こと食料安全保障になると「バイオを減らそう」と主張を変えるのはおかしい話です。そこで考えてほしいのは、食料安全保障、エネルギーや気候変動、産業や経済を考慮した時に、バイオエネルギーはそもそもどのぐらい促進すべきものなのか？促進するなら、どのように食料確保とのバランスを取って進めていくべきなのか？ということです。ですので、バイオエネルギーを促進するにしても、段階的に促進するのか、限定的に促進するのか、制限をかけるのかという側面で交渉をし、食料安全保障に対するマイナス効果を軽減する方向でないと今会議の決議案としては意義がありません。一方で、一切の制限をかけずにバイオエネルギーを促進したいのであれば、国によっては前述の「化石燃料」と同様に、文言に入れること自体を許容できないかもしれません。

・「フードロス」という用語について

PPPにフードロスについての言及が多く見られました。非公式会議（モデを含む）ではフードロスという言葉を使っていたとしても結構ですが、決議案や公式発言の際には「food waste」

(日本語の場合は「フードウェイスト」もしくは「食品廃棄」という用語に統一してください (BG38 ページ)。

・アウト・オブ・アジェンダ① 人口増加について

「人口増加のシミュレーションは多種あるが、今会議では「World Population Prospect 2019」を前提とする。」という一文のあるように、人口増加は既定の事実としてとらえてください。人口が増加するからますます生産力を強化していかなくてはならないし、ますます食料問題はシビアになっていくのは共通の認識としてください。既定の事実なので前文などで触れるのは問題ないですし、今回のミッションでも本筋として言及されています。しかし、仮の話ですが、人口が現在のまま増えずに維持されたとして、もしくは仮に減少したところで途上国が抱えるような食料安全保障上の問題は解決するのでしょうか？おそらく解決されない部分が多く残るのではないのでしょうか。そう考えると人口増加に食料不足の原因を擦り付けても根本的な解決にはならず、そもその食料安全保障のシステムを考え直し、再構築しないと解決に至らないものと考えます。そのために、人口増加はあくまでもバックグラウンドとして捉えてください。

・アウト・オブ・アジェンダ② 紛争について

紛争、戦争についてはいくつかの PPP で言及が見られました。今回アウトオブアジェンダに設定しているのですが、今回参加する国の中でも、ウクライナ、ロシア、中東、アフリカ諸国の中には食料問題が紛争とは切り離せない国がたくさんあります。当然、話題にせざるを得ない場面があるでしょう。ただし、それらはあくまでも今回はバックグラウンドとしての議論です。ウクライナ・ロシア戦争が小麦の供給に大きな影響を与えているのは周知の事実ですが、仮に明日戦争が終結されたらその問題はどうか解決するのでしょうか。紛争、戦争が食料安全保障にとっても根深い問題であることは事実ですが、これらは不確定な変数として捉えていきたいというのが私たちフロントの意図です。話題にさせていただいて構いませんが、公式な政策として言及することはできません。

・アウト・オブ・アジェンダ③ 経済制裁について

⇒ Q&A を参照のこと

・アウト・オブ・アジェンダ④ 飢餓について

⇒ Q&A を参照のこと

・本当にミッションをできるのか？

今会議では皆さんに会議ミッションが課されています。このミッションの目的の1つは皆さんに対する意識付けです。「誰が」「誰(何)のために」「いつまでに」「どのように」というゴールを明確にして、確実な議論を大使に義務付けるという目的です。それを2030年、2050年というタイムラインに乗せて、より責任をもって、よりシステムチックに問題解決にあたるということが問われる会議です。

ミッション設定のもう1つの目的は評価を明確にするためです。ゴールが設定されていなければ、決議(解決策)も会議自体も評価もできません。DR が採択されたところで、本当にそれがミッション達成につながっているのか。DR に全ての国の意見が反映されたところで、本当にそれが「良い DR」と言えるのか。実際の国連会議でもそうですが、会議が終わったところで世界は何一つ変わりません。重要なのは、決議を起点として実際の課題解決が始まると考えれば、「この決議がどう実行され、それによってどの程度ゴールを達成できるのか」という観点からクリティカルに評価されなくてはなりません。

以下の3点からそのミッションが達成できるのか、自国及び他国の政策を分析しましょう。

- ① 本当に2030年、2050年までに与えられたミッションを達成できるのか。
- ② 本当に「全ての人々に」食料を保障できるのか。
- ③ 本当にSDGsの求める食料安全保障の政策が立案できているのか。

・タイムラインの設定とその意義

今回の会議ミッションを、短期、中期、長期という3つの時間軸を設定して考える際、みなさんはこの3つの時間軸をどのぐらいのスパンでとらえますか？短期は即時対応、中期は社会、環境、法の整備、長期はマインドと意識の変容という考え方にあたります。つまり「短期的には即時対応できる問題に取り掛かり、2030年、2050年までに構造改革を達成し、さらにそれ以降も続くような意識付け、マインド形成を行う」というのがイメージです。

模擬国連では体制や法の整備が主眼になることが多く、その点では、具体性がある中期的な解決策は非常によく議論されます。一方、長期的な部分は、消費行動や価値観の改革、教育という部分も含まれてきます。そのような観点も含めて課題解決を「持続可能なもの」として意識してみましょう。

<Q&A (BG・PPP編)>

・X国では、経済制裁などによる経済悪化、それに伴う食料不足が非常に深刻だという現状があります。経済制裁は厳密には経済対策ではないと思うのですが、アウト・オブ・アジェンダの扱いはいかがでしょうか。

経済制裁は論点4の適切な食料分配の弊害になっているという文脈で論点の中で議論ができますので、認められます。ただし、国連には制裁権もあり、また二国間であっても経済制裁は可能です。経済制裁がどのように&どの程度、決議案の内容として関連性があるのか、またそれがどのように文言として反映されるべきなのは大使の皆様の議論に委ねます。

・「飢餓に対する政策」について述べるのが禁じられていますが、これは今会議のミッションである“Zero Hunger”(=飢餓0)の議論と密接に結びつくものだと理解しております。特に、アウトオブアジェンダとする理由として「飢餓に対する政策が含まれるということは、2030年に飢餓が残っていることになり、『Zero Hunger』を目指す今会議のミッションは達成されないことが前提になってしまう。」と記載されていますが、飢餓に対する政策が含まれることと2030年に飢餓が残っていることとの相互関係が不明瞭だと感じました。仮に2030年時に飢餓0になっていたとしても、その後の社会状況によっては再度発生しうるものであり、そのような政策を含むことはむしろ国際社会にとって今後も気を引き締めて飢餓対策を行い続けるという点において有効なのではないかと考えました。その点からアウトオブアジェンダについて再度ご説明をお願いいたします。

(★この点はフロント内でも事前に議論をしたところでしたが、結果として私たちの意図が十分にお伝えできていなかったと感じております。皆さんのBGの解釈が変わる部分があるかもしれませんが、この回答で再設定させていただきます。)

私たちのアウトオブアジェンダに関する意図を簡潔にお伝えすると、今会議では、飢餓が起きた際の対応策を話し合う会議ではなく、飢餓を根絶できるように、そして起こさないように食料安全保障全体の持続可能なシステムや国際協力体制そのものを話し合ってもらいたいと考えています。当然飢餓を根絶することがZero Hungerにつながるの、今ある飢餓をどう根絶していく

のかということは今会議の重要な課題です。その意味では、飢餓を根絶することに対する政策は食料安全保障の仕組みそのものであると考えます。

また、社会情勢や天候、災害などにより 2030 年度以降も飢餓が生じることは実際にはあると思いますし、その際にはまた国連などの場でどう対応するのかを話していくことになることでしょう。しかし、上述の通り、今回は飢餓が起きたときの対応策に焦点を当てている会議ではありません。

良い例かわかりませんが、病気＝飢餓として説明すると、病状を回復させて 2030 年までにいったん健康な体を作り上げ、その後 2050 年さらに厳しい時代になっても健康を維持できるようにすることが今回の会議の目標です。今むしばまれている身体に対してどのような治療をして、どのような投薬をして健康体にしていくのかということが今回の議論になります。

一方で、2030 年以降も体調不良や病気は発生する可能性はありますが、それは個別の治療プログラムとして進めていくことであり、それを今会議で含むと議論が広がりますし、治療プログラムとしては別物となっていくと考えており、身体（＝食料安全保障システム全体）を健全体にしていくことは切り分けていきたいと考えています。「今ある飢餓」に対しても、個別の飢餓の対応が機能しても、仮に食料安全保障全体として健康体を作れていないのならミッションの達成にはなりません。また、2030 年もしくは 2050 年以降の安全保障システムの前提として「飢餓の対応」を全体論として入れてしまうと、Zero Hunger のミッションがそもそも達成されていない前提が色濃くなってしまふという懸念もあります。

その点から、健康体になったとしても、個別のケースとして飢餓は生じるだろうけれどもその議論は「飢餓が起きたときの対応策」という側面に任せて、今会議ではまずは飢餓のない世界、飢餓を起こさない社会という点に全力を注いでいただきたいと考えています。

ですので、結論として、以下のようにご理解いただければ幸いです。

- ・ 2030 年までに今ある飢餓を根絶し、Zero Hunger を達成するための政策は食料安全保障全体の議論として認める（健康体の構築）。
- ・ 2030 年以降、飢餓を起こさないための政策（管理体制など）も認める（健康体の維持）。
- ・ ただし、2030 年以降の話として、飢餓についての政策は「飢餓が起きたときの対応策」（有事の際の治療プログラム）として認めない。

<Q&A（会議細則、プロシジャー編）>

・ 会議進行について： 一般議場では WP・DR の説明とそれに対する質疑応答は英語と日本語のどちらを用いて行うのでしょうか。

前提として、スピーチ、公式討議の議事進行は公式会議に当たるので英語で行います。モデは非公式会議に当たるので日本語です。アンモデも非公式なので日本語です。

回答として、WP、DR の提出は公式会議中で行われるので、説明も英語で行っていただきます。一方で、質疑応答はモデという設定になりますので、日本語で行います。

（WP、DR の説明と質疑応答は別の会議形態です）

・ 初日の 9 時 10 分からスピーチの事前登録が行われますが、スピーチの順番は事前登録用紙の提出順で決まるのでしょうか。

9 時 25 分に事前登録を締め切った後、フロントの方でランダムに順番を決めてスピーカーズリストを作成いたします。ですので、提出の順番は関係なく、9 時 10 分に一番乗りで提出してもスピーチは後半になる可能性も、その逆もあり得ます。

・ワーペ、DR は USB 提出で提出とみなされると書いてありますが、中高校舎に印刷しに行く、という記述もあり、これはどういった目的でしょうか。紙も提出しなければ、受理されないということでしょうか。

大使の皆さんが WP や DR を提出する際には、そのデータを入れた USB を時間内にフロントの元へ提出していただく必要があります。しかし、紙での提出等は必要ありません。印刷機は WP や DR の提出後に、議場の大使の皆さんに提出された WP・DR を紙で共有するためにフロントが使用するものです。今回、議場は大妻女子大学ですが、印刷は隣の大妻中高の校舎まで事務局が往復をして行うため、移動や印刷時間も含めると配布までかなりの時間を要します。そのため、枚数の制限や提出時間にご理解をください、という趣旨で細則に記載をさせていただきました。

・会議準備の時間に最初のメモを入れたファイルをフロントに提出という記述をはじめとしたメモの詳細、使い方について、具体的にご説明ください。「二回目からのメモ」というものもご説明をお願いします。

メモについて簡単に説明しますと、オンライン会議ではチャット機能などを使って送られる、簡易メッセージのことです。「チャット」という呼び方をされることもあります。主に個別の大使間で非公式討議中に連絡を取り合うためのものです。対面会議においては小さなメモ用紙を使用します。そのため、大使と大使の間でメモを手動で運ぶ必要があります。その役割は当日、フロントが行いますが、メモが解禁された直後には、多くの大使から大量のメモが送られるため、フロントの作業が追いつかない可能性があります。そのようなことを防止するため、メモが解禁された直後に送られる予定のメモに限り、会議準備時間の間に各国に割り振られたファイルに入れていただくこととしました（各国の宛先が入った郵便ポストのようなものだと思ってください）。メモの解禁後に、ファイルごと各国に配布することで、少ない手間で各国にメモを配布することができます。もちろん、メモを送るか送らないかは任意ですので、必ず用意しなければならないものではありません。

このクリアファイルに投函して送られるメモを第 1 回目のメモとしております。その後メモが全面解禁されますが、それを「第 2 回目のメモ」として表現しました。メモの解禁がされてからは、スピーチ中を除いて、基本的にいつでもメモを送り合うことができます。メモを送れるタイミングが 1 回目、2 回目、3 回目…と決まっているわけではありません。

★以下の関先生の HP の中で模擬国連の基礎知識の解説がなされています。そちらもぜひご参照いただくとよろしいかと思ます。

Max Classroom.net 模擬国連のページ
<http://maxclassroom.net/mun.html>